

マルクス=エンゲルス全集版

資 本 論

3

資本論 第三卷
剰餘價值論
剰餘價值與利潤

資 本 論 (3) (全9冊)

1972年4月10日第1刷発行
1982年4月10日第13刷発行

定価はカバーに表示してあります

訳 者◎ 岡 崎 次 郎

発行者 平 智 享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

発行所 株式会社 大 月 書 店

印刷 三晃印刷
製本 田中製本

電話(営業)813-4651(編集)814-2931 振替 東京3-16387

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください

国 民 文 庫

25

資 本 論

(3)

第一卷 第三分冊

カール・マルクス著
岡 崎 次 郎 訳



大 月 書 店

KARL MARX
DAS KAPITAL
Erster Band

KARL MARX • FRIEDRICH ENGELS
WERKE • Band 23

Institut für Marxismus - Leninismus beim ZK der SED
Dietz Verlag Berlin 1962

From German translated by Jiro Okazaki
Otsuki Shoten Publishers, Tokyo
Printed in Japan, 1972

目 次

第五篇 絶対的および相対的剰余価値の生産	九
第四章 絶対的および相対的剰余価値	九
第五章 労働力の価格と剰余価値との量的変動	二七
第一節 労働日の長さで労働の強度とが不変で（与えられていて）労働の生産力が可変である場合	二八
第二節 労働日と労働生産力とが不変で労働の強度が可変である場合	三五
第三節 労働の生産力と強度とが不変で労働日が可変である場合	三七
第四節 労働の持続と生産力と強度とが同時に変動する場合	三九
第六章 剰余価値率を表わす種々の定式	四三
第六篇 賃 賃	五三
第七章 労働力の価値または価格の労賃への転化	五三
第八章 時間賃金	六七
第九章 出来高賃金	八一

第二〇章 労賃の国民的相違	九六
第七篇 資本の蓄積過程	一〇五
第二章 単純再生産	一〇八
第二章 剰余価値の資本への転化	一三〇
第一節 拡大された規模での資本主義的生産過程 商品生産の所有法則 の資本主義的取得法則への変転	一三〇
第二節 経済学の側からの拡大された規模での再生産の誤った把握	一四五
第三節 剰余価値の資本と収入とへの分割 節欲説	一五二
第四節 資本と収入とへの剰余価値の分割比率とは別に蓄積の規模を規 定する諸事情 労働力の搾取度——労働の生産力——充用され る資本と消費される資本との差額の増大——前貸資本の大きさ	一六四
第五節 いわゆる労働財源	一八二
第三章 資本主義的蓄積の一般的法則	一八八
第一節 資本構成の不変な場合に蓄積に伴う労働力需要の増加	一八八
第二節 蓄積とそれに伴う集積との進行途上での可変資本の相対的減少	二〇四
第三節 相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産	二二四

第四節 相対的過剰人口の種々の存在形態 資本主義的蓄積の一般的法

則……………二三四

第五節 資本主義的蓄積の一般的法則の例解……………二四六

a 一八四六—一八六六年のイギリス……………二四六

b イギリスの工業労働者階級の低賃金層……………二五八

c 移動民……………二七四

d 恐慌が労働者階級の最高給部分に及ぼす影響……………二八一

e イギリスの農業プロレタリアート……………二八九

f アイルランド……………三三三

第二四章 いわゆる本源的蓄積……………三五七

第一節 本源的蓄積の秘密……………三五七

第二節 農村住民からの土地の収奪……………三六二

第三節 一五世紀末以後の被収奪者にたいする血の立法 労賃引き下げ

のための諸法律……………三九二

第四節 資本家的借地農業者の生成……………四〇五

第五節 農業革命の工業への反作用 産業資本のための国内市場の形成……………四〇九

第六節 産業資本家の生成……………四一六

第七節 資本主義的蓄積の歴史的傾向……………四三五

第二十五章 近代植民理論……………四四〇

注 解……………四五七

「資本論」各分冊（全九冊）目次

文庫版(4) 第二卷第一分冊

第二部 資本の流通過程

第一篇 資本の諸変態とその循環

第二篇 資本の回転

（第一章 流通期間 まで）

文庫版(5) 第二卷第二分冊

第二篇 資本の回転

（第一章 回転期間が資本前貸の大きさに及ぼす影響 より）

第三篇 社会的総資本の再生産と流通

文庫版(6) 第三卷第一分冊

第三部 資本主義的生産の総過程

第一篇 剰余価値の利潤への転化と剰余価値率の利潤率への転化

第二篇 利潤の平均利潤への転化

第三篇 利潤率の傾向的低下の法則

第四篇 商品資本および貨幣資本の商品取引資本および貨幣取引資本への転化（商人資本）
（第一章 商人資本の回転価格 まで）

文庫版(1) 第一卷第一分冊

第一部 資本の生産過程

第一篇 商品と貨幣

第二篇 貨幣の資本への転化

第三篇 絶対的剰余価値の生産
（第七章 剰余価値率 まで）

文庫版(2) 第一卷第二分冊

第三篇 絶対的剰余価値の生産
（第八章 労働日 より）

第四篇 相対的剰余価値の生産

文庫版(3) 第一卷第三分冊

第五篇 絶対的および相対的剰余価値の生産

第六篇 労働賃

第七篇 資本の蓄積過程

文庫版(7) 第三卷第二分冊

第四篇 商品資本および貨幣資本の商品取引資本

および貨幣取引資本への転化(商人資本)

(第十九章 貨幣取引資本 より)

第五篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂 利
子生み資本

文庫版(8) 第三卷第三分冊

第六篇 超過利潤の地代への転化

第七篇 諸収入とそれらの源泉

文庫版(9) 解題・索引

訳者後記

解題(『資本論』成立小史および全巻構成略説)

『資本論』総目次

文献目録

人名索引

文芸作品・聖書・神話登場者名索引

事項索引

度量衡・通貨表

第五篇 絶対的および相対的剰余価値の生産

第一四章 絶対的および相対的剰余価値

労働過程は、まず第一に、その歴史的諸形態にはかわりなく、人間と自然とのあいだの過程として、抽象的に考察された（第五章を見よ）。そこでは次のように述べられた。「労働過程全体をその結果の立場から見れば、二つのもの、労働手段と労働対象とは生産手段として現われ、労働そのものは生産的労働として現われる。」そして、注七では次のように補足された。「このような生産的労働の規定は、単純な労働過程の立場から出てくるものであって、資本主義的生産過程については決して十分なものではない。」これが、ここではもっと詳しく展開されるのである。

労働過程が純粹に個人的な過程であるかぎり、のちには分離してゆく諸機能のすべてを同じ一人の労働者が一身に兼ねている。彼は、自分の生活目的のために自然対象を個人的に獲得する場合には、自分自身を制御する。のちには彼が制御される。個々の人間は、彼自身の筋肉を彼自身の脳の制御のもとに活動させることなしには、自然に働きかけることはできない。自然の体制で

(532)

は頭と手が組になっているように、労働過程は頭の労働と手の労働とを合一する。のちにはこの二つが分離して、ついには敵対的に対立するようになる。およそ生産物は、個人的生産者の直接的生産物から一つの社会的生産物に、一人の全体労働者の共同生産物に、すなわち労働対象の扱いに直接または間接に携わる諸成員が一つに結合された労働要員の共同生産物に、転化する。

それゆえ、労働過程そのものの協業的な性格につれて、必然的に、生産的労働の概念も、この労働の担い手である生産的労働者の概念も拡張されるのである。生産的に労働するためには、もはやみずから手を下すことは必要ではない。全体労働者の器官であるということだけで、つまりその部分機能のどれか一つを果たすということだけで、十分である。前に述べた生産的労働の本源的な規定は、物質的生産の性質そのものから導き出されたもので、全体として見た全体労働者については相変わらず真実である。しかし、個別に見たその各個の成員には、それはもはやあてはまらないのである。

ところが、他方では、生産的労働の概念は狭くなる。資本主義的生産は単に商品の生産であるだけではなく、それは本質的に剰余価値の生産である。労働者が生産するのは、自分のためではなく、資本のためである。だから、彼がなにかを生産するというだけでは、もはや十分ではない。彼は剰余価値を生産しなければならない。生産的であるのは、ただ、資本家のために剰余価値を生産する労働者、すなわち資本の自己増殖に役だつ労働者だけである。物質的生産の部面の外から一例をあげることが許されるならば、学校教師が生産的労働者であるのは、彼がただ子供

の頭に労働を加えるだけではなく企業家を富ませるための労働に自分自身をこき使う場合である。この企業家が自分の資本をソーセージ工場に投じないで教育工場に投じたということは、少しもこの関係を変えるものではない。それゆえ、生産的労働者の概念は、けっして単に活動と有用効果との関係、労働者と労働生産物との関係を包括するだけではなく、労働者に資本の直接的増殖手段の極印を押す一つの独自に社会的な、歴史的に成立した生産関係をも包括するのである。それゆえ、生産的労働者だということは、少しも幸運ではなく、むしろひどい不運なのである。本書のなかでも理論の歴史を取り扱う第四部では、古典派経済学はもとから剰余価値の生産を生産的労働者の決定的な性格としていたということが、もっと詳しく示されるであろう。それゆえ、経済学が剰余価値の性質をどのようにに把握するかにしたがって、その生産的労働者の定義も違ってくるのである。たとえば、重農学派は、ただ農耕労働だけが剰余価値をもたらすのだから、ただ農耕労働だけが生産的だ、と言う。だが、重農学派にとっては、剰余価値はただ地代という形態だけで存在するのである。

労働者がただ自分の労働力の価値の等価だけを生産した点を越えて労働日が延長されること、そしてこの剰余労働が資本によって取得されること——これは絶対的剰余価値の生産である。それは、資本主義体制の一般的な基礎をなしており、また相対的剰余価値の生産の出発点をなしている。この相対的剰余価値の生産では、労働日ははじめから二つの部分に分かれている。すなわち、必要労働と剰余労働とに。剰余労働を延長するためには、労賃の等価をいっそう短時間に生

(533)

産する諸方法によって、必要労働が短縮される。絶対的剰余価値の生産はただ労働日の長さだけを問題にする。相対的剰余価値の生産は労働の技術的諸過程と社会的諸編成とを徹底的に変革する。

だから、相対的剰余価値の生産は、一つの独自の資本主義的生産様式を前提するのであって、この生産様式は、その諸方法、諸手段、諸条件そのものとともに、最初はまず資本のもとへの労働の形式的従属を基礎として自然発生的に発生して育成されるのである。この形式的従属に代わって、資本のもとへの労働の実質的従属が現われるのである。

剰余労働が直接的強制によって生産者から取り上げられるのではなく、資本のもとへの生産者の形式的従属も現われていないような、いろいろな中間形態については、ただそれを指摘しておくだけでよい。資本はここではまだ直接には労働過程を征服していないのである。父祖伝来の経営様式で手工業や農業を営む独立生産者たちと並んで、高利貸や商人が現われ、これらの生産者から寄生虫的に吸い取る高利資本や商業資本が現われる。一つの社会のなかでのこのような搾取形態の優勢は、資本主義的生産様式を排除するが、他面では、中世後期にそうだったように、それへの過渡をなすこともありうる。最後に、近代的家内労働の例が示すように、ある種の中間形態は、たとえその相貌はまったく変わっているにせよ、大工業の背後であちこちに再生産される。

絶対的剰余価値の生産のためには、資本のもとへの労働の単に形式的な従属だけで十分で、たとえば、以前は自分自身のためかまたは同職組合親方の職人として働いていた手工業者が今は賃

金労働者として資本家の直接的支配に服するということが十分だとしても、他面では、相対的剰余価値の生産のための諸方法は同時にまた絶対的剰余価値の生産のための諸方法でもあるということが示された。じつに、労働日の無限度な延長こそは、大工業の最も固有な産物だということが示されたのである。一般に、独自の資本主義的生産様式は、それが一つの生産部門全体を征服してしまえば、ましてすべての決定的な生産部門を征服してしまえば、もはや相対的剰余価値生産の単なる手段ではなくなる。それは今や生産過程の一般的、社会的に支配的な形態となる。それが相対的剰余価値生産のための特殊な方法として作用するのは、第一には、ただ、これまではただ形式的に資本に従属していた諸産業をそれがとらえる場合、つまりその普及にさいしてだけのことである。第二には、ただ、すでにそれにとらえられている諸産業が引き続き生産方法の変化によって変革されるかぎりでのことである。

ある観点からは、絶対的剰余価値と相対的剰余価値との区別はおよそ幻想的に見える。相対的剰余価値も絶対的である。なぜならば、それは、労働者自身の生存に必要な労働時間を越えての労働日の絶対的延長を条件としているからである。絶対的剰余価値も相対的である。なぜならば、それは、必要労働時間を労働日的一部分に制限することを可能にするだけの労働の生産性の発展を条件としているからである。しかし、剰余価値の運動に注目するならば、このような外観上の無差別は消え去ってしまう。資本主義的生産様式がすでに確立されて一般的な生産様式になってしまえば、およそ剰余価値率を高くすることが問題となるかぎり、絶対的剰余価値と相対的剰余

価値との相違はつねに感知されざるをえない。労働力が価値どおりに支払われることを前提すれば、われわれは次の二つのどちらかを選ばなければならない。労働の生産力とその正常な強度とが与えられていれば、剰余価値率はただ労働日の絶対的延長によってのみ高められうる。他方、労働日の限界が与えられていれば、剰余価値率は、ただ必要労働と剰余労働という労働日の二つの構成部分の大きさの相対的な変動によってのみ高められ、この変動はまた、賃金が労働力の価値よりも低く下がるべきでないとすれば、労働の生産性かまたは強度の変動を前提する。

もし労働者が彼自身や彼の子孫の維持に必要な生活手段を生産するのに彼の時間の全部を必要とするならば、彼には第三者のために無償で労働する時間は残らない。ある程度の労働の生産性がなければ、労働者がこのように処分しうる時間はないし、このような余分な時間がなければ、剰余労働はなく、したがって資本家もなく、さらにはまた奴隷所有者も封建貴族も、一口に言えばどんな大有産者階級もないのである。

—「二つの別個の階級としての雇い主と資本家の存在そのものがすでに労働の生産性に依存しているのである。」(ラムジ『富の分配に関する一論』、二〇六ページ)。「もしも各人の労働が彼自身の食料を生産するに足りるだけならば、財産というものは存在しえないであろう。」(レーヴンストン『国債制度とその影響の考察』、一四ページ)。

こうして、剰余価値の自然的基礎について語ることもできるのであるが、それは、ただ、ある人が自分の生存に必要な労働を自分の肩から他人の肩に転嫁することを妨げるような絶対的な自

(535)

然的障害はなにもないというまったく一般的な意味で言えるだけであって、それは、たとえば、他人の肉を食料として使うことを妨げるような絶対的な自然的障害はなにもないというようなものである。しばしば行なわれることではあるが、このような労働の自然発生的な生産性に神秘的な観念を結びつけるようなことは、けっしてしてはならない。人間が彼らの最初の動物状態からやっと脱け出してきて、彼らの労働そのものもすでにある程度まで社会化されてきたときに、はじめ、ある人の剰余労働が他の人の生存条件になるような諸関係が現われる。文化の初期には、労働の既得の生産力は小さなものであるが、欲望もまた小さいのであって、欲望はその充足手段とともに、またこの手段によって、発達するのである。さらに、このような初期には、他人の労働によって生活する社会部分の割合は、大ぜいの直接生産者に比べれば目にはいらないほど小さい。労働の社会的生産力が増進するにつれて、この割合は絶対的にも相対的にも増大する^二。そのうえに、資本関係は、長い発展過程の産物である経済的な土台の上で発生する。資本関係がそこから出発する基礎となる既存の労働の生産性は、自然のたまものではなく、何千もの世紀を包括する歴史の所産なのである。

一 a 最近行なわれた算定によれば、地球上のすでに探險すみの地域だけでも、まだ少なくとも四〇〇万の人食い人が住んでいる。

二 「アメリカの未開なインディアンのあいだでは、ほとんどすべてのものが労働者のものである。一〇〇〇のうち九九までが労働の分けまえに勘定されることになる。イギリスでは、労働者はおそらく三分の二